



巻頭言	・・・ 1
冬期総数カウント調査	・・・ 2
第4回国際 エコキャンプ	・・・ 2
エコキャンプ交流会 北海道標茶高等学校	・・・ 3
本の紹介① ジョージ・アーチボルド著	・・・ 5
本の紹介② スコット・フリーマン著	・・・ 7
今年の冬の珍客 クロヅルが飛来しました	・・・ 8
ICFから視察	・・・ 9
<活動記録>	・・・ 10

### 認定NPO法人の指定をタンチョウのために活かすには 理事長 百瀬邦和

この度タンチョウ保護研究グループが認定NPO法人として認められました。北海道では12番目、釧路市では初めての認定です。タンチョウ保護研究グループは大きな団体とは言えませんが、活動に参加してくださっているボランティアの方々の存在、そしてこれまで一緒に行ってきた活動の成果が、認定につながったと心から感謝しています。

北海道のタンチョウは今、様々な問題をかかえています。給餌量の削減とそれに関連してその他の野生動物も含めた給餌（餌付け）そのものに関する是非論、道東からの分散に向けた手法の検討など、人間との問題や近年顕著になってきた気候変動？の影響などが複雑に関係し、将来の見通しが難しくなっています。

そもそも、過去半世紀以上にわたって右肩上がりです数を増やしてきたタンチョウは現在も増え続けているのでしょうか？タンチョウが北海道でいつまでも増え続けることは考えられませんので、何時か個体数の増加が止まり、その後減少に転ずることが予想されます。もしかしたらそれはもう始まっているのかもしれませんが。少しでも実数に近い生息数を知るために毎年タンチョウ保護研究グループが行っている総数カウント調査は、益々重要な意味を持つものになってきています。また越冬地に加えて、これからの営巣地の分散状況や密度の変化を把握していくのも、北海道のタンチョウの将来を見守るためには重要です。

今回の認定を機に、タンチョウ保護研究グループが、これまで以上に活動成果やタンチョウの現状を広くアピールしていくことが、人間社会と、そしてタンチョウからも求められているということかもしれません。新年度からは、自信と責任を持って新しい気持ちで活動していきます。みなさまのご参加と応援をお願いいたします。

## 今年の冬も総数カウント調査が行われました

富山 奈美

今年も恒例の当NPO主催の総数カウント調査を行いました。2018年1月26日～2月5日までの9日間、北海道に越冬するタンチョウの生息状況（越冬数、今年の幼鳥数、越冬地での分布状況など）を調べました。

この調査は、ボランティアの皆さんにご協力をいただいております。今年は、総勢31名（のべ153人）の方々に参加していただき、無事に調査を終えることが出来ました。また、事前情報をお寄せくださったボランティアの方々もいます。本当にありがとうございました。

今年は例年より道東の冬の訪れが遅く、なかなかツルが給餌場へ集まらなかったため、班長さん達はハラハラし通しでした。

今年のカウント調査の様子をまとめてみました。

**1月26日 音別** 給餌が始まるギリギリまで給餌場に来ないツルの群れの確認に奔走しました。中国から来た大学生達が活躍してくれました。

**1月27日～28日 阿寒** 昨年の強風とうって変わって、今年は良い天気にも恵まれた順調な調査でした。

**1月29日～30日 十勝**  
1m以上の積雪に強風。道路状況も悪く、朝の気温-24℃。悪条件の中、参加者の皆さんの活躍で沢山のツルが確認できました。

**2月1日 中茶安別**  
川から飛んでくるツルもいれば、歩いて給餌場を出入りするツルもいて、給餌場は一日中大忙しでした。雪原にちらばるツルに総数担当は数えるのに四苦八苦でした。

**2月2日 標茶** 各班に分かれての調査でしたが、広範囲に沢山のツルが確認されました。標茶の畑跡には、国後島から渡って来たベラヤ（Tancho32号参照）が確認されました。

**2月3日～4日 鶴居** 初日は好天に恵まれ、順調に調査が進みました。鶴居村では1羽のクロヅルが越冬しています（今号、高田さん記事参照）。  
クロヅルはサンクチュアリに現れ、鶴見台班は見ることができませんでした。4日は、釧路地方に大雪・暴風雪警報が出たため、調査を中止しました。

**2月5日 根室方面** 巡回調査でしたが、前日の荒天でツルたちも移動したのか、ツルが全く確認できない班もあれば、大当たりの班もあったようです。

来年も調査へのご参加を心よりお待ちしております。皆様、どうぞよろしくお願いいたします。調査結果は、また改めてご報告いたします。



中茶安別での調査の様子

## 第4回国際エコキャンプを開催しました

事務局

タンチョウ保護研究グループは、イオン環境財団から助成を受けている「ツル類と湿原保護のための環境教育活動」の一環として、第4回国際エコ

キャンプを釧路地方で開催しました。当法人は2012年より中国において国際ネイチャースクール（INS）を共催していますが、今回はINSの学生

指導員の中から4名を選抜、1月22日から28日まで招聘しました。

参加した学生たちは、地元で自然環境問題に取り組んでいる北海道標茶高等学校を訪問して生徒たちと交流したほか、釧路市立博物館をはじめとする施設を視察、釧路国際ウェットランドセンターの活動のレクチャーを受け、首都圏を中心とした大学生が環境問題のフィールドとしているキナシベツ湿原を視察、また、当法人の実施した第35回

タンチョウ総数カウント調査に参加する等、盛り沢山のスケジュールをこなしました。

このキャンプは、中国と日本とにおけるタンチョウにとっては異なる生息環境の問題点を認識し、種としてのタンチョウ保護という視点を共有し、また、湿原に生息するタンチョウを通して、自然環境、特に湿地環境保護に向けた継続した保護教育普及活動へ繋げることを目的としています。



第4回国際エコキャンプの学校訪問で  
中国の学生との交流会に参加して  
北海道標茶高等学校生徒

私たちが学ぶ北海道標茶高等学校は、北緯43.3度、東経144.6度に位置し、日本で最も広大な敷地面積を有します。敷地内にある湿原やため池と、牛舎から出た堆肥場を利用している親子のタンチョウを見られる環境があり、私たちにとってタンチョウは身近に感じられる存在です。そこで、地元の高校生や小学生たちに、タンチョウが生息する地域の素晴らしさを伝え「田舎には何も無い」という感覚をなくし、地域に誇りを持ってもらいたいと願い、自然環境問題に取り組んできました。タンチョウについて学習し、専門家へのインタビューを行い、タンチョウかるた等の教材を制作し、地元の小学生や高校生を対象に環境教育を行なっています。また、日本鳥学会でもポスター発表をするなど、様々な場面で「タンチョウ」が生活する地域の素晴らしさを発信してきました。



この度は、タンチョウ保護研究グループ主催の国際エコキャンプの一環として当校で中国の学生さんたちとの交流会が開かれました。参加した当校の生徒の声をお届けします。

【北海道標茶高等学校教諭 吉沼 利晃】

先日は、中国の学生の方と交流をさせていただく機会を作ってくださいありがとうございました。貴重な体験となり、少ない時間でしたがとても楽しかったです。私が一番思い出に残っているのは、中国の大学生の方が発表してくれたプレゼンテーションです。今まで中国の自然や環境について学ぶ機会がなかったので、スライドを見させてもらったときには、「この活動素敵だな!」、「こんな活動ができればもっと自然や環境に私たちだけではなく、地域の方に興味を持ってもらえるな!」などとても参考になるものばかりでした。

今回のこのような交流の場を作って頂いた百瀬さんをはじめ、たくさんの方に感謝しています。またこのような機会があれば是非参加したいです!本当にありがとうございました。【藤田菜央】



私は学校の系列活動で留学生や海外の方と関わったことはありますが、中国の方とコミュニケーションをとったのは初めてでした。学生の方々は環境教育や自然環境にとっても興味があり、スライド発表やディスカッションで中国での取り組みを教えてくださいました。私達高校生も標茶高校の取り組みを発表しましたが、英語でのコミュニケーションにおいて、中々通じなかつたり言いたいことが伝わらなかつたりと言葉の壁を感じました。今後はもっと英語力を高めて、環境活動を世界の人々に発信できるように頑張りたいです。

【油谷彩優里】



今回の交流では、海外と標茶町周辺でよく見かけるタンチョウの違いや、タンチョウへの感じ方の違いを学びました。本校を訪問してくれた中国からの学生の皆さんは、「タンチョウをこんな近くで見たことがないし、すごくきれいに見える」と、標茶町のタンチョウの写真を見てとても驚いていました。国や環境によって生息の仕方が違い、観察の仕方も違うものの、「タンチョウを大切にしたい」という気持ちは国境を越えても同じだと感じられました。

【山内楓鈴】



今回、私たちの学校の紹介をさせていただき、また中国の学生さんの取り組みについてプレゼンテーションしていただき、他国の大学で行われている環境教育の活動内容について知ることができたよい機会となりました。

私たちが考えたオリジナルネームカード作りでは、日本語で名前を教え、実際に書いたものをもっと喜んでいただけて、私たちもうれしい気持ちになりました。

【相座羽李】

私は今までフランスやアメリカの方との交流はしましたが、中国の方との交流は初めてでした。交流の準備を進める中で、英語のコミュニケーションということもあり、しっかりと本校での取り組みを紹介できるか、自分の想いを伝えることができるかなど言語の不安が多々ありました。しかし、中国の学生さんは初対面であっても笑顔で受け入れてくれたので、緊張もすぐにほぐれ楽しく交流することができました。中国の大学で行われている環境に関する活動の中で、「都市部に住む子供たちを自然の多い田舎に連れていき環境を直に感じてもらう」という取り組みがおもしろく、私たちの活動の参考にもなるものでした。【村山太一】

私は他国の方と関わるのは初めてのことで、今の英語力でどう伝わるか、相手の英語をどれだけ聞き取れるか、それらを試行錯誤しながらのコミュニケーションは大変でした。また、企画したネームプレート制作や折り鶴も伝え方が難しく苦労しましたが、私にとって良い経験をさせていただきました。

その後の交流では中国の大学についての話を聞かせてもらい、有意義な時間を過ごし、今後も国際的な交流をしたいと感じる良いきっかけとなりました。  
【加藤終汰】



## 本の紹介① My Life with Cranes. George Archibald著 古賀 公也

ジョージ・アーチボルト。その名前を始めて知ったのは、平成元年、ちょうど学位論文を仕上げている最中に米国鳥学会AUK誌に掲載されていたツルの成長に関する論文を読んだ時だった。私の隣の席には、韓国の慶熙大学校から留学されていた具大倉教授がおり、ツルの専門家として韓国環境省へもの申すことができる実力者であった。その教授が「この論文のジョージ・アーチボルトを私は知っている」と誇らしげに話していたことは今でも深く心に刻まれている。当時、私にとってのツルは単に毎春、出水市からの北帰行の際に調査地で群れて帆翔しながら上昇気流に乗り去って行く大型の鳥であって、自分が将来ツルに係わるようになるとは夢にも思っていなかった。

次にジョージ・アーチボルトの名前を聞いたのは、5年後の平成6年にツルの研究に携わるべく道東阿寒町に着任したときであった。タンチョウ保護調査連合（現、タンチョウ保護研究グループの前身）の正富宏之代表（当時）、百瀬邦和副代表（当時）や百瀬ゆりあ事務局から、1970年代、青年アーチボルトが様々な障壁を乗り越えながら北海道でのタンチョウ飛行調査や生態調査を行い、その成果を世間に突きつけ、タンチョウ保護にもっと取り組むよう日本国さえも動かした、そんなすごい情熱のある人だと聞かされた。

着任当時は、電子メールがまだ一般に普及していない時代であり、国際ツル財団から阿寒国際ツルセンターへのオグロヅル輸入のために、アーチボルト博士と手紙やFAXで数回やりとりした。実際にお会いできたのは、翌年にツル飼育法、アメリカシロヅルのコスチューム飼育技術や野生復帰技術、世界でのツル保護活動や行動計画

などについて学ぶために、国際ツル財団で二回、計約6ヶ月の研修を受けた時だ。といっても、米国到着時、博士は海外出張中で、実際にお会いできたのは到着後半月以上経ってからだった。

その時の印象はとても穏やかで、対外的に折衝してバリバリと突き進むタイプと勝手に想い抱いていた人物像とはかけ離れていた。

当時のツル財団では、石油会社AMCOの数億円寄付によりAMCOアメリカシロヅル展示場が建設されたばかりで、そのオープニング式典に合わせてテレビ番組が組まれていた。幸いにも、ツル財団ゲストハウスの広いリビングルームに1人掛けソファにゆったりと座って、スポットライトの中、インタビューに答えるアーチボルト博士の様子を、静かに見守る機会を得た。

そんな博士の周りに陣取っている、自分の世界ではなかなかお会いしそうにもない、ちょっと近づきたい雰囲気セレブ的面々が印象的だった。

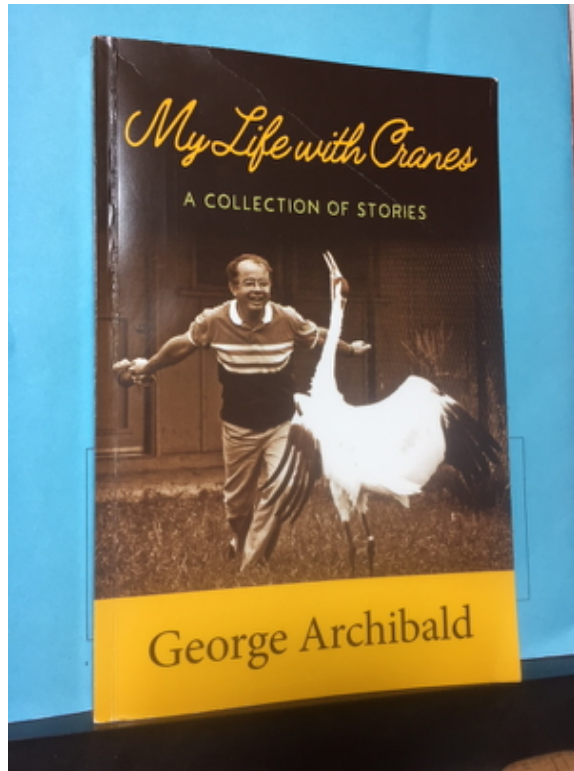
ツル財団研修中に起こった博士にまつわる、博士ならではのエピソードの一つは、博士がツル財団へ戻る飛行機で隣の席に乗り合わせた男性と話をしている中、意気投合し、ツル財団のクレインシティ（65番いほを飼育しているエリア）のケージに有線の監視カメラシステムが寄贈されることになったことだ。寄附文化が定着していない日本人としては、全くの驚きだった。

博士はツルの第一人者でありながら、自然や野生生物に造詣が深く、特にトキの保護への関心は強く、どうしてそこまで博学で関心事が

広いのだろうかと常々思っていた。私の帰国後も、博士とは日本に来られた時に百瀬ご夫妻からお会いする機会を頂いているが、とにかく顔の広さには驚かされるし、熱烈なファンが多い。動物の保護を最前線で進める人物ってどういう生き立ちなのか、また自分が研修を受けた国際ツル財団を立ち上げ、世界的組織へと牽引した人物はどういう人なのか、どうしてこんなに人々が魅了され協力するのか、誰も気になるところだ。そんな博士と共同設立者の盟友故ロン・サウエイ博士のことが著されている本が出版されるのは当然のことで、22年前に二人が主人公である本が出版された時、知りたい一心で直ぐにその本を買った。しかし、分厚い英語の本であり、第三者が書いたこともあって、読み通せず、結局、疑問は払拭できなかった。

あれからついに、本人が著した自伝的本が出版された。文章の語り口は博士らしく柔らかく、英語を母国語としない人も意識したのか、辞書を片手に読み解くことができるし、また短い文章の中にエッセンスが詰まっている。もちろんツル財団での研修当時が懐かしいこともあるのだが、本には知りたかったことが散りばめられていた。読み進むにつれ、ツルの保護への情熱と実行力もさることながら、博士の人柄に魅了された人々が磁石のように吸い寄せられてくる理由も判る気がした。また、野生動物の保護や研究者など、錚々たる人々との交流にも驚かされた。動物の保護にはそうした魅力ある人が重要なのだ、そう理解できる。

そして読みながら、25年前に阿寒に着任して直ぐの時に頂戴した、タンチョウ保護の大家二人からの教えを思い出した。一つは「ツルの保護が成功するかどうかは、ツルに対してではなく人（とどうつきあうか）だ。」という正富宏之専修大学名誉教授の言葉、もう一つは「人は大事だ。



嫌な思いをさせられても、その人に誠意をもって接していたら、ある時から強い味方になってくれた。」という高橋良治丹頂鶴自然公園名誉園長の言葉。「人への誠意」、それが博士とは違った凡人の自分には“魅力ある人”に代わる重要なキーワードなのかもしれない。

英語の本書は入手が難しいが、もし機会があれば、是非、読んでもらいたい。まるで映画を見ているかのように話が展開して行き、更に豊富な写真が臨場感ある光景を脳裏に浮かべてくれる。写真を見ているだけでも、ツルの保護に邁進した博士のこれまでの半生が垣間見られる。

## 本の紹介②

渡邊 剛弘

Scott Freeman, "Saving Tarboo Creek: One Family's Quest to Heal the Land", with illustrations by Susan Leopold Freeman. Timber Press, 2018

スコット・フリーマン著『ターブー川の救出～ある一家の大地を治す試み』  
(スーザン・レオポルド・フリーマン イラスト)

破壊された自然はどのように救出できるのでしょうか？

スコット・フリーマンの新刊『Saving Tarboo Creek』はその質問に自らの行動で答え、その答えを記録した本です。

この本の舞台である米国ワシントン州のオリンピック半島は、広い原生林と昔の姿のまま

の海岸が、国立公園として守られています。近年、公園内にあるエルワダムが、米国最大のダム解体事業として話題になっています。

しかし、国立公園を一步出ると、自然破壊のスピードは衰えていません。林業と農地の拡大による森林の減少と劣化、そして取水堰などが造られているため河川環境の悪化も見られます。

また、人口増加と都市化も進んでいます。

そのような流域で、スコットと奥さんのスーザンは、2人のお子さんと地域の団体と協力してターブー川を再生する取組みを始めました。2004年に土地を購入し、自ら川の流れを変え、在来木の苗を植林し、侵略的な外来植物を駆除することにより、元の自然を取り戻しました。

この本では、その活動を紹介するだけでなく、生物学者としての知識を用いて、サケの産卵や木と菌類の共生関係についてわかりやすく解説しています。また、アマゾン熱帯林や地球温暖化などグローバルなレベルまで視野を広げつつ、この取組みの意義を述べています。そして、画家のスーザンが描いた挿絵は、読者を和ませてくれます。

スーザンの祖父は、アルド・レオポルドという、米国では環境保全の父といわれる人物です。彼はウィスコンシン州で、荒れている土地を購入し、子供達と一緒に家を立て、自然を元に戻す活動を始めました。

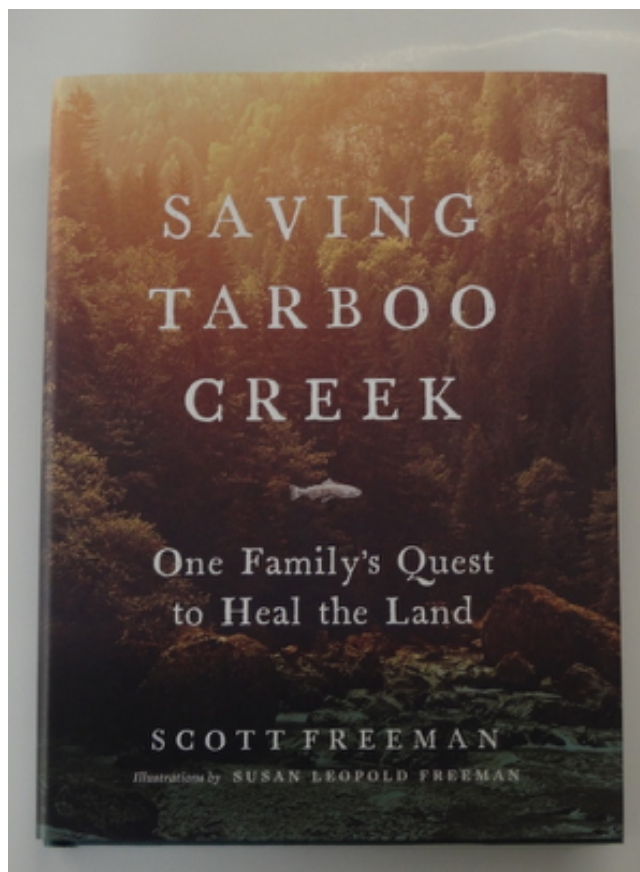
その土地の風景描写や、自然に対する倫理をまとめた著書が、1949年出版の

A Sand County Almanac

(邦訳 『野生のうたが聞こえる』)です。

レオポルドの本、そしてスコットの本は、自然を再生するに当たって、工事で自然環境を整えるためだけではないことを訴えているように感じます。彼らの取組みは、小規模で手作り感の溢れた事業だからこそ、どのように自然と接するべきかを考えさせられます。

自分たちの手で自然再生に取り組むと、多くの発見や様々な感動があります。外来植物の駆除をしている時に見かけるハクトウワシ、木の間引き作業の時に発見したビーバーの痕跡。そのような発見があるからこそ、研究のテーマが決まり、挿絵の表現対象が見つかります。そして、



その感動があるからこそ、自然の尊さを感じ、真の自然保全活動に繋がります。自然と触れ合うことによって、新しい文化が誕生するのです。

自然破壊は、環境を失うだけでなく、その環境に対する人間の関わり方も失います。自然の再生をしても、人間の考え方や営みを見直し新たな自然観を作り上げなければ、また同じ歴史を繰り返す危険があるのでないでしょうか。自然の再生を次世代につなげるのには、考えや感性の再生も重要です。

スコットが本の最後にこのように呼びかけています。「社会人としてスタートするあなた、もしくは若い人を指導する立場のあなた、この本はあなたへの呼びかけなのです。新しい道を見つけることを手伝って下さい。」実に、若い人に読んで欲しいと思います。

今年の冬の珍客、クロヅルが飛来しました

高田 令子

昨年の秋(10月13日)、中標津の阿部嗣さんからの連絡で、中標津町内にクロヅルが飛来

していることを知りました。すぐに現場へ向かい、デントコーン畑で10羽ほどのタンチョウと一緒に

いるクロヅル1羽を確認しました。根室管内でクロヅルが確認されたのはこれが初めてです。根室管内で確認されたツルの仲間は、タンチョウ、ソデグロヅル、アネハヅルに次いで4種目となりました。

クロヅルはタンチョウと行動を共にしている様子でしたが、タンチョウはクロヅルを嫌っているようで、常にクロヅルを遠ざけようとしていました。同じツルの仲間であっても、体色の全く違うクロヅルをタンチョウは強く警戒していました。



中標津で確認された時の様子



鶴居村での様子 タンチョウに追われる



12月10日からは、鶴居村でクロヅルが確認されます。その頃には、中標津町内では観察されなくなっていたので、多分、同一個体であろうと思っています。鶴居村では32年ぶりの飛来だそうです。

鶴居村でも、クロヅルはタンチョウから追回され、意地悪をされている様子でしたが、3月を過ぎた現在も滞在し続けているようです。

クロヅルの本来の生息地はユーラシア大陸ですから、そろそろ見納めかもしれませんね。どのようなタイミングで旅立つのでしょうか？



## 国際ツル財団(ICF)から視察に見えました。

事務局

2018年2月12日から18日まで、ICFからダーシー・ラヴさんとテッド・サウザンドさんが、視察に見えました。ICFでは現在、大規模な野外・室内展示の改修が行われており、それに向けての視察です。

様々なタンチョウ越冬地、給餌人の方々、また、環境教育のための施設を訪れ、取材をなさいました。

写真は釧路市音別町で給餌人をなさっている高橋さんのお宅での取材風景です。

高橋さんは20年以上冬の間、来る日も来る日も、タンチョウに給餌をなさってきました。何がこの長年の給餌を支えているのか、という問いに、高橋さんはただ一言、「美しさだね、タンチョウの美しさだ。」とお答えになりました。



## 認定NPO法人とは

事務局

タンチョウ保護研究グループは、認定NPO法人になりました。

全国でNPO法人全体に占める認定NPO法人の割合は2%に満たない状況です。

信頼性が高く、公益性のある活動をしていると評価されたNPO法人だけが、行政から「認定NPO法人」の認可を受けることができます。

認定NPO法人は、活動を支援するための税制上の優遇措置を受けることができ、広く寄付を集めることができます。寄付をした個人又は法人には、所得税及び住民税、または法人税が一定額戻ってきます。また、相続人が寄付する場合は、寄付をした財産は相続税の計算に含まれません。

さらに認定NPO法人自身にも優遇措置があり、収益事業から特定非営利活動に係る事業のために支出した金額は収益事業からの寄付金とみなすことができます。寄付金とみなされた金額には税金がかからず、特定非営利活動のために使うことができるのです。

認定NPO法人となったことで、さらにタンチョウ保護研究グループの活動が広げられるようにしたいと思います。

これからも、どうぞよろしく願いいたします。

## <活動記録> (2017年11月 ~ 2018年3月)

11月30日	会報Tancho32発送	2月9日	運営会議(4名出席)
12月8日	環境省のタンチョウ保護収容等研修会で講演 (於: 苫小牧市ウナイ湖野生鳥獣保護センター 百瀬) 運営会議(9名出席)	2月12日	ICF職員のD. ラヴ氏、T. サウザンド氏来釧 ~18日 (百瀬・百瀬ゆりあ)
12月12日	釧路湿原自然再生協議会 第19回湿原再生小委員会に出席(百瀬)	2月13日	釧路市湿原自然再生協議会 第4回地域づくり小委員会に出席(井上)
12月13日	根釧農業試験場にてデントコーンの寄贈を受け ニオ等に配布(百瀬・大河原)	2月14日	釧路湿原エゾシカ対策検討会議 に出席(百瀬)
12月15日	釧路湿原自然再生協議会 第30回再生普及小委員会に出席(百瀬ゆりあ)	2月18日	キナシベツでFAIにレクチャー(百瀬)
12月25日	釧路総合振興局農村振興課と農業農村整備 事業の件で協議(百瀬)	2月27日	第24回 釧路湿原自然再生協議会に出席(百瀬)
1月12日	運営会議(9名出席)	3月2日	運営会議(4名出席)
1月13日	カウント調査勉強会 (於: 釧路市わっと 富山、百瀬) カウント調査班長会議	3月8日	認定NPO認定に向けての道の査察
1月22日 ~28日	国際エコキャンプ、中国から学生4名来釧	3月13日	釧路湿原自然再生協議会 第16回 水循環小委員会に出席(井上)
1月26日 ~2月5日	カウント調査	3月13日	道より認定NPO法人の認可が下りる

### <会員 (3月20日現在)>

会員数: 183名 (運営会員: 27名、個人サポート会員: 138名、団体サポート会員: 18団体)

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

# TANCHO

Thirty-third issue March 2018

### <表紙写真>

タンチョウの飛び立ち

(2011年 2月撮影)

特定非営利活動法人

タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: [tancho1213@pop6.marimo.or.jp](mailto:tancho1213@pop6.marimo.or.jp)

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>